いずみさの昔と今 第326回

「弥生土器の美」

いよいよ1月21日(土)より冬季特別展「大阪の弥生文化ー和泉と河内ー」がスタートします。和泉市の大阪府立弥生文化博物館（以下「弥生博」という。3月31日まで施設改修のため休館中）と共同で企画するものですが、今回は、展示の目玉の一つ、弥生博が誇る船橋（ふなはし）遺跡の弥生土器コレクションを紹介します。

藤井寺市と柏原市にまたがる船橋遺跡には、江戸時代に付け替えられた大和川が横断しています。かつて河川敷からは、縄文時代から中世までの土器・石器などの遺物が大量に採集することができたそうです。弥生博が所蔵する資料は、遺跡の近くに住んでいた松岡　樹さんが採集されたもので、その遺存状態の良さや豊富なバラエティーで、考古学界では古くから知られていました。

弥生土器のシンプルながらも機能的な形態は、現在にも通用するデザインセンスを感じさせます。貯蔵するための壺、そして食べ物を盛り付ける高坏（たかつき）は大小、形態に複数の規格があり、使い方がイメージしやすい水差し形やコップ形の土器には親しみを感じます。

弥生時代中期は文様が最も華やかな段階で、簾（すだれ）のようにみえる文様は遺跡のある河内で特に発達しました。先端が櫛のように分かれた板状の工具を水平方向に断続的に押し引きながら施しました。

展示では資料の状態にぜひ注目してください。欠損や表面の摩滅がほとんどない船橋遺跡の土器は、2千年以上の歳月を経たものとは信じられないくらいで、弥生人の息吹を直接感じることができます。いにしえの工芸美として出土品を鑑賞されてはいかがでしょうか。

ただし、船橋遺跡の土器の魅力はアートとしての美しさだけではありません。その多くが濃い茶褐色に焼き上がっています（写真　展示は一部）。これは考古学で「生駒山西麓産土器」として知られ、角閃石（かくせんせき）を多く含み、現在の東大阪市・八尾市の生駒山のふもとの粘土で作られました。その特徴的な色調などから離れた地域で出土しても識別することができ、土器の移動が読み取れます。土器を運ぶのは人であり、運ぶ理由があったはずですから、地域間の交流を明らかにすることにつながります。

和泉市・泉大津市の池上曽根遺跡など和泉地域の遺跡からも生駒山西麓産の弥生土器が数多く確認されており、両地域のつながりを示します。河内の土器はその美しさで和泉の人も魅了したに違いありません。

▲船橋遺跡出土弥生土器（弥生時代中期）
提供：大阪府立弥生文化博物館

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑪

～ふとん太鼓（太鼓台）～

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

ふとん太鼓（太鼓台）

ふとん太鼓（太鼓台）は、東瀬戸内地方や淡路島から北前船の交流によりもたらされた飾り山車のことです。豊漁・海の安全を祈願して、春日神社の夏まつりで使われるもので、いわゆる「漁師の祭り」のことです。

泉州では、本市の他に堺市や貝塚市などもふとん太鼓を使った祭りがあります。現在本市では、野出町・春日町・新町（昭和初期では元町を入れた4町）の3台のふとん太鼓が町内での練り回しと春日神社への奉納、春日神社のみこしが旧佐野町内の御旅所を回る「渡御」で成り立っています。この祭りの起源を調べると、春日神社に明治41（1908）年に合祀された住吉神社の祭礼を吸収して継承される祭礼であったことが明確になっており、祭りの献灯台に掲げる提灯の構成にも、海に関わる人々の繋がりが窺われるものとなっています。